

ある急性皮膚炎



中西淳朗

あれからもう40年以上経た話である。
「特別室に入院がありましたよ」という婦長の連絡で病室に行ったところ、高名なる老作家がベッドの上に座って私を待っていた。非常に気むずかしい人であることは承知していて、この方の家の前を通るとき垣根ごしに、縁側で詰将棋に考えこんでいる姿を時々眼にしているからである。こう書けば文学通の先生方なら、あっ彼だと気づかれようが、あえてペンネームを明らかにしない。

顔面、両手、両足、軀幹に浮腫を伴う強い発赤に、ところどころ小水疱が混在しており局所熱感がかなりある。とてもかゆいという。

「ひどい姿になったもので、あの水虫薬を買って来てつけたのがいけなかったと思うよ」と、ムツとしている。

当時、自由業の人には健康保険がなかったので、「まずステロイドの内服をしましょう。それに注射、抗プラスミン剤を午前中に、夕方には強力ネオミノファーゲンCとビタミンCを私が打ちに来ます。外用薬はチンク油を主体とします。見た目が悪いから面会謝絶としましょう」というと、老作家は満足した様子であった。面会謝絶が気にいったのだ。

数日して病状は峠をこした。そこで奥さんに用いた水虫薬を持参してもらおうと、スイスのロシュ製薬

のアステロールというクリームであった。そこで、「もう2～3日したら、背部に貼布試験をしましょう。それでこのクリームが犯人であることが決まります」と話すと、老作家はウンとうなずいた。

「先生、かゆいよ。かゆいよ。またはれて来た。どうということなんだ。試験もしていない両手がまたはれた。顔もむくんだし早くなおしてくれ。1日も早く退院したい」

「すまんことです。再治療すれば2～3日で退院できます」ここでペコンと頭をさげた。

昨年、ニキビのことで調べごとをしているとき、賀川哲夫博士編の『標準医語辞典』（昭和13年刊）でアステロールを引いてみた。

Asterol：外用防腐剤、パラフェノールスルホン酸水銀と、酒石酸アンモニウムから成る、とある。

何んと60年前の皮膚科医編集のベッドサイド便利辞典に出ているではないか。昔は売薬の成分明示が箱に行なわれていなかったから、小生は「強烈な売薬皮膚炎でした」で済ましてしまった。いま考えると、あれは水銀皮膚炎であった。酒ばかり飲む不勉強者め！

恥しい話だが、本誌以外に書いても解っていただけないので、投稿した次第です。

戦中日記（昭和17年）



中野政男

山田風太郎『戦中派焼け跡日記』を読んで感心した。

昭和21年、焼け野原の東京で喰うものもロクにないあの時代、世の中を見つめて毎日の世相を描写し、東京医専が大学に昇格する際の学内事情を書き、その間にも大量の本を読んでその感想まで書いた、一医学生の克明な日記で資料としても貴重なものと思う。

著者は私の2歳年下で、この時期私は医局のFresh Manで修行をしていたはずだが、日記は書いていない。何処かに日記らしいものはないかと書庫を探したら、昭和17年から20年終戦の日までのノートが出てきた。

そこで山田風太郎『戦中派虫けら日記』を見るとこれは昭和17年11月25日から始まっていて17年初頭は欠落している。17年初頭とは日米開戦から1カ月も経たない時期で、緒戦の大戦果に国中が沸きかえっていた、まことに儂い、夢のような半年なのである。

この時期、日吉の予科から、3カ月の短縮で四谷の医学部に進学し、いきなり解剖学を詰め込まれた戸惑いと不安の毎日は、昂揚した戦争気分と共に今でも思い出して感慨無量である。山田風太郎日記の欠落期間の一部を、私の戦中派日記、1-2月でお目に掛けて補遺としたい。

昭和17年：皇紀2602年、西暦1942年、23歳

元旦

新しき世界史の第1年は雲1つない快晴に明けた。東方から黄金の陽光が拡がって来る。光は東方より！ 明るい世紀の黄金の光は東より昇る。民族の喜び。御民たるの誇り！

7時、父の代理で小日向神社参拝。なかなか人が集まらぬ。型通りの式。然し清々しさが感ぜられた。寒気を衝いて青空を初陽に翼を黄色く輝かせて戦闘

機の編隊がぐるぐる廻っている。いつもの正月ではないのだ！ 朝刊は紙面の半分を以てハワイ空襲の写真を載せている。海軍が撮ってきたもので、血湧き肉躍るものがある。よく撮ったものと感心する。人も来ない。松飾りもない。しめやかで宜しい。

午前中、『獅子座の流星群』と『舞姫』を読了す。

午後、ポカポカ陽気で、本も読めず且つねむいので、2時、靖国神社参拝に出かける。たいした人出だ。Dort herrscht buntes Lebenとはこういう事か。ポーッとなるくらい。映画館の景気のみて、帰りに木村伯母のところによる。母が来ていた。

夕刻より、『罪と罰』を読み始める。

夜、フイと気が向いて、母と江戸川館に行く。一杯の人なり。辛うじて入る。『戸田家の兄妹』名作だと思った。香港攻略のニュース映画で血を沸かす。

9時過ぎ、帰る。クワンタン占領の報あり。

2日

朝刊各紙にハワイ攻撃実戦談がTOPで出る。勇壮、壮絶なり。

10時前、父と神楽坂東宝に行く。意外に混んでいなくて腰掛けを得。海軍空襲部隊撮影のニュースを見るのが目的。この映画、短いが批判を超越した大映画だ。薄暗い中に大きく上下して揺れる母艦の姿が2つ見えたときはハッとした。魚雷を抱いて飛ぶ奴、大きな爆弾1つを抱えた奴。画面は揺れるが感動はさらに大きく動く。歴史に残る映画だ。乗員の落ち着き！ 同時上映した『川中島』は愚作。1時、帰る。食後入浴、なかなか快適。2時半、高橋一族来る。6時、帰る。新年唯一の客なり。夜寒くなる。『罪と罰』を本格的に読む。殺人のところは凄い。

3日

暁の寒さ格別。松山より来信。午前中、読書。午後、マキ割りと読書。夕刻、散歩に出る。帝大一根

津一帯グルグル—権現様—伝通院、2時間かかる。
夕刻、マニラ入城の公報。夜、松山に手紙書き。

4日 日曜

風強し。朝寒く凍結物多し。10時、町会警防団の防空資材の査閲あり。我、旗手となり列立す。あと読書、午後も読書、夜は7時半～11時半迄一心に読み『罪と罰』読了す。終わりの方はへバツタがなかなか良い。

5日

晴。午後アマンさん訪問、在宅。話をして市電で帰る。一寸銀座の方に行ってみたが、人が大勢居るのでイヤになってやめる。『知られざる傑作』の一部、『その前夜』の一部読む。

6日

ゆっくり起きる。お菓子をゴウユウに買った夢を見る。9時、朝飯をすませたところへ田中君来る。妹の女高師の試験についてきた由。上がって一寸話す。飛行機を見に共に上野の山に行く。9時37分、浅草寄りの上空を海鷲（海軍機）500通過。高度高くよく見えず。中攻が主。上空に艦戦、陽に映えて黄色く光っている。大したものだ！ 圧倒される。上野の山を歩きつつスパイみたいな話。45000トンの戦艦etc。

（注：夢声戦争日記、「空に轟々たる音響である。階下に駆け下り大急ぎで、洋服ダンスから双眼鏡をとり出し、2階に上がって見る。壮観。翼は紫色に、胴体は緑色に見ゆ」）

10時、陸鷲500機上野の方を通る。よく見えない。夕刻、金ちゃん宅。歓談。餅をもらって帰る。休暇終わりぬ。

7日

四谷に出校。時間表を貰う。金ちゃん、アマンさんと荻野君の家に行くことになり、田中君もで4人同行。浅草橋—吾妻橋（ドジョウ汁で飯、豆腐を食う）—公園—荻野宅まで歩く。1時、Recordを聴き餅をご馳走になる。

曲目

1. Scheherazade
2. 小諸なる古城のほとり

3. お琴

4. Winter Reise

5. 悲愴

6. Eroica

5時、辞去。向島—市電—小川町—（本を求めて）神保町（稲垣休み）—水道橋。此处で生理学の（上）を古本で求む。金ちゃん帰る。アマンさん飛行機の本買う。

8日

晴れのち曇り。8時、四谷に登校。進学手続きでゴタゴタする。

9時、大詔奉読式、続いて始業式。諸先生の訓話。10時半、終わる。外苑にて、観兵式参列の飛行機の編隊を見る。市電で神保町、アマン氏と一緒に。稲垣で生理学の（下）の古本を求む。結局生理の本で4円浮かせて貯金することにする。12時、学校に帰る。天気が良いので木銃返納に三田まで行く。途中代々木—原宿を歩いて戦車隊の行進に会う。キャタピラーの音がしない。銅のアンテナ、ゴウユウ也、中型と小型が主。木銃返納、一書を求めて帰る。四谷に進学すると色々感想が湧く。

午後、日吉行きの市電の中で、5円1銭しかなくて、回数券もなしコマカイのもなくて弱っていたら、日大の人が切符1枚くれた。親切身に沁む思いあり。渡る世間に鬼はない。

9日

授業第1日、解剖学。スリッパを買わされた。先日聞いたとき、いらぬと言ったのにイヤな奴だとまづムクレル。シュルツェの人が数人やってきて着席した。彼等はボード拭きを業とする。教室員とはそんな仕事をするんだ。不甲斐なさ。入ってきた解剖の加藤信一の印象も暗い。早速骨学でラテン語のなぐり書き。写しにくさ、第一印象頗る不良、いやになった。生理、林さんの哲学めいた話 一向興味が無い。四谷に来て希望は粉碎され心は暗い。

10日

曇り。福翁記念日で休み。部屋の掃除。水道橋で定期の書き換えをせんとせしにダメ。忠さん訪問談合、天井をご馳走になる。Silver-shirts-society、キャノピーの説等。忠さんの雄大なる「日本は世界の

中心なり」という話。同道して家に来る。餅を焼いて食う。夜飯を共にす。ビール、父も話に加わる。10時前、帰る。

11日 日曜

曇り。10時前、出宅。日吉、定期の経路変更を要求す。1時間待てと言う。教室に行くも人気なし。図書館は休み。メシを食い馬場の下宿に不在中入り込み謄写版の道具を持ち出す。空き巣ねらいの感100%。経路変更して1年分延長してくれた。都立高校下車、服部先生訪問。同級生や来客多し。木村の下宿訪問、餅を食う。大垣内宅で閑談、謄写版の原紙を借りてくる。夜、斉藤修来る。かわいい後輩。

12日

雨。教室暖かでの前より宜しい。Wirbel終わる。人骨をGruppeにくれる。一寸見てくる。生理の田崎テエのはべらべらよくしゃべるイヤな奴だ。生田(医学英語)来る。すぐ始めて数名アタル。寒いので早く帰る。夜、雪降る。

13日

雪。Histologie、この教師はよく判る。宜しい。Biochemie、1時間ですむ。なかなか感じが良い。一旦帰宅。食後、出かける。教練永澤大佐、色々話あり。寒い。

14日

発生学：谷口教授、さっぱり要領を得ぬ。生理：久保氏、これも大同小異。

昼、付近でオヤコを食わされ50銭ボラれる。

医道学：石田氏のシンガポールの話。シンガポールの衛生状態のいいこと。英人の良所。ゴムの過剰。有益だった。夜、ノート整理。レキシントン轟沈す。快哉。

15日

医者になりうる自信があるのか？ 医者は崇高なものと思っていた。全人類の救済を夢見ていた。若い時の夢は破れた。あァ単なる名前BNAの羅列よ！ 亡者どもが——教室に残る奴らイクジナシが多いと言ったが——入れ替わり立ち現れては去る。ノートするのは俺1人だ。1人対数人！ ああ医者

になるには智も哲学もいらぬ。ただ要るのは無神経な忍耐だ。忍耐！ 半分に割られた男の頭、胸郭標本の、実に空虚な人間の鶏ガラ。こんなものが正視出来るか！ しかも「医者達」はそれらを抱きかかえて講義する。白骨は美しいが、肉塊は成る程汚い！ 俺はめまいがした。詩や万葉の歌を愛するものには耐えられぬ事だ！ 人の言うようにこれはユダヤ的学問だ。2時間ぶっ通しにガナル教師、うなる頭、ああくらくらす。真っ暗な忍耐。今更どうにもならぬ。医学部ってトンデモナイところだ。全くの話3年9カ月 自分を殺して我慢しよう。仕方がないじゃないか。そして兵隊に行つて若くして戦死するのだ。美しい白骨になるのだ。

16日

望月氏の解剖実習全般の注意。

生理：林氏、Nervenの説明、面白かった。生田寒い。昼、四谷迄メシを食いに行つてあぶれる。菓子を食べる。風邪を引いた。鼻水が出る。痛ましきかな、解剖の教室のストーブが原因だ。

17日

風邪まだ良くならず。発生の講義テンデ分ならず。医化学は実習の道具の検査だけで帰してくれる。道具は相当ある。強風、Lugolをつけて貫う。午後『昭和風雲録』を読む。面白くて感銘多大。夜、knochenを見る。

18日 日曜

Muskelの勉強をしようと思ったらKopf-muskelの絵でいやな気持ちになった。面皮を剥いだ頭なんか研究できるかどうか自信がない。感情を刺激せぬknochenは覚えるのが大変だ。Muskelの講義に生首を振り回されるのかと思うと幻滅だ。転科を考えるが、何に転科する由もない。予科の3年を無駄にするには惜しい。3年9カ月、懲役に行つたつもりでジツこらえるまでだ。病気になるねば良いが。

19日

朝、道すがら懲役3年9カ月としみじみ思つて心が暗くなった。一寸遅刻。行きついてもれば暗い教室、“信一”ががんが骨をすつ飛ばす。胸を締めつけられるような圧迫感！ 学問に嫌悪を抱いて、か

ばかり胸を締めつけられたことがあるだろうか！
されど行くにところなし。生理も何だか面白くない。
友人と2～3詰まらぬ事を言っている間だけ心が解ける。
放課後、意を決してWirbelを見た。当たって碎けるだが、
案外覚え易く分かって一寸気が楽になった。午前中のユウウツが人ごとの様に思われてきた。

20日

昼、家に帰るつもりで飯田橋まで来たが12時なの
でとても時間がないと断念して神楽坂に行ったが20
日で大抵は休み。白十字で口惜しい飯を食った。

午後、教練。グラウンドでやる。検定なので俺が
小隊長をやる。対空射撃、まあ旨くやった。終わって
骨を見るつもりで行ったら、骨の本がないので置き
忘れと思って方々探したがない。解剖室に入って
聞いたが分からない。屍体を見たが汚いと思った。
諦めて帰る。紛失を補う為、今日諸角氏から貰った
翻訳を6頁ばかり夜10時半までかかってやった。1
頁50銭の由。翻訳で金をとるのは生まれて初めて。
こんな事でもしなくては医学だけでは神経衰弱になる
(海軍から委託されたAleutian列島の英文地誌の
翻訳、Kodiak等出てきて、後になって北方作戦の
資料と知る)。

21日

発生学、くだらないと思う。分からないのだ。分
かる奴は1人もおるまい。生理のBlutの講義は面白
かった。

医道学、「海軍、大戦果のよって来たるところ」。
東日の田村氏の話はなかなか旨くて面白かった。終
わってすぐ帰り翻訳をやる。昨日の分を原稿紙に書
いたので捗らない。腕がへバル。

22日

終日Osをやる。Muskel-lehreはたまらない。世界
中の人間が死んでしまえ!!

23日

骨学、遂に頭を残して終わる。呆然たり。夜、サ
ッカー部先輩の小野口、橋村氏の入営を東京駅に送
る。その他数名の先輩の各部員の見送り盛ん。

24日

医化学、実験なし。早く帰る。

25日 日曜

終日在宅して翻訳を完成せんと企画す。正午、4
年終了で士官学校に行った配野中尉来る。まあ上が
れとメシを止めて話す。2カ月位東京にいるという。
珍客なり。士官学校での国家観念教育はしっかりし
たものだ。クラス会をやることにする。

26日

骨の頭のところ分かりはせぬ。ウンザリ。生理の
田崎の奴はいい気になってしゃべっていやな馬鹿
だ。解剖の助手、点呼を取る。中学のクラス会の準
備でアチコチ。

27日

組織の時間、助手が紙に出席を書いて出させたの
で、皆大いにムクレて助手を攻撃する。解剖の女の
助手のタイド甚だ悪し。教練検定なので早く帰して
くれる。翻訳をやり、身辺整理。

28日

宇田尚氏の医道学、面白くなし。日本精神のこ
とはテンデ分からなかった。神楽坂のお菓子まずし。

29日

大串さんのMuskel面白くない。講義に熱はある
のだが何となく疲れる。夜、クラス会。酒を飲み大
いに語る。終わって本郷で焼き鳥5円50銭食う。配
野が5円おいていったのだ。来会者中入営するもの、
多田、小沢、藤井、相沢、忠さん。

30日

Os分からネエ。Osの終わり頃に川辺治六先生急
逝の報あり。生理が1時間のびて病院の裏でお送り
する。自動車事故の由。風強し。

夜、多田宅で壮行会。一家に、増井、野末と余が
加わり、痛飲する。寂しさと勇壮さが混じってクダ
を巻く。あの男が行ってしまうのは一寸痛い。人を
送るのは寂しいものなり。男の義務とはいえ、何と
なく寂しいのである。

31日

二日酔いで発生学サボル。医化学から出る。メシを病院で食い、戸山学校へ銃剣道訓練。風が強いのでヘバル、各学年2人宛で6人が行く。

2月1日 日曜

4時半、家を出て、夜の街を歩いて多田宅に行く。上野発7時1分、我孫子着。隊まで軍用道路、9時入営する。手を振って別れる。学生が多い。寒い。雪降る。東京着11時45分。夜また雪降る。10cm以上。翻訳をやる。

2日

生理をサボッテ翻訳をやる。生田終講。

3日

福翁命日、田中と墓参。新宿の文化ニュースに行き、皆と『若い人』を見る。なかなか良い。

4日

医道学、時間に遅れて入場できず。藤田中佐の話なり。昼休みから夕方まで張り切ってOsを見る。腕から先を一通り見る。Tibiaの左右の見分けなんか一寸面倒だ。

5日

医化学終了後、帰宅してメシ。解剖の大串さんはサボル。3時からOsの実習をやるが、ガヤガヤ駄弁って予定通りできず。

夜、Lehrbuchで足から先を全部見る。

6日

今日も残ってOsをやる。頭骨まで来る。金チャンの猛勉に感心する。夜もOsの勉強をした。

7日

解剖谷口教授休講。四谷に来て初めての休講だ。帰宅する前に別館にいる金井先輩に健康診断をして貰う。Geraushが聞こえるから血沈をする。

10時帰宅。午後、母と東宝に映画を見に行く。寿司を食べてから帰宅。国民服に着替えて上野に行き忠さんと配野の奢りでCafeに入って7時~10時半まで飲む。周りの客が下劣で知性の存在を許さず。

12時帰宅。支払い24円。詰まらぬ費えだ。

8日 日曜

頭がモヤーとする。猛烈に冷える日だ。うちに米が不足しているので、外食すべく10時頃病院に行って別館でメシ。金井先輩にGesundとの診断。お礼を言って帰る。

9日

寒い。第一時、大串さんなのでサボッテ、生理から出る。よほど『朝焼け』を見に行こうかと思ったがやめる。5時半までOsをやる。Schlafenbein、Keilbeinをやる。夜もOs。手が冷たくてかなわん。シンガポール、上陸成功。

10日

寒い。医化学休講。2回目の休講だ。家に米がないので帰るわけにも行かず、山田の弁当を半分食う。金チャン、おでん、吉村と新宿に行きお菓子を食う。皆、Osをよく知っているので感心した。12時半より教練、教室で臨時徴兵検査の話。慰霊祭があるので1時半解散。吉村と『朝焼け』を見に行く。面白くかつ有益だったが、近頃映画館の中がうるさくて、興を殺がれること甚だしい。教養のない奴が来るからだ。夕刻から非常に寒くなる。テングー飛行場を占領したと。

11日

紀元節。10時半、三田で式典。金ちゃん、アマンさんと三田で飯を食い、芝浦に船を見に行き御成門で別れる。シンガポール、高地を占領して市街を制圧した。夜のニュース、市街突入を告げる。胸が沸き立つ思い。占領も近い。

12日

寒いのに登校したら組織学休講、休むなら前もって言っておけばよいのに。これで休講3回目。やることがないので田中と新宿まで出張。閉店が多くて金ちゃんと飯屋で昼食。解剖、面白くない。骨を見て帰り、夜、頑張って全身の骨を一応見終わる。後は覚えるだけだ。

13日

生理が11時半に済む。メシ屋休みでうどん屋で食

べてボラれる。病理学の標本のGehirnやUterusを見た。嫌な臭いがする。放課後2年の委員と懇談会。気持ちのいい人が多い。生理の講義の評判をして、その学問的なのを知らされて感心した。ノートし易い講義が良いと思うのは積年の通弊だ。夜、読書。休養だ。

14日

発生のノートを要領よくとる。考えながらとると名講義だ。医化学実習はGlukoseの反応、沢山ある。丁寧にやって自分のHarnを見たがZuckerなし。小宮豊隆の『漱石、寅彦、三重吉』という本、神田で探して遂になし。残念なり。

15日 日曜

夜半より降り出した雪が大雪となり午後止む。大いに積もる。9時、スキーを持ち出しコンロでWAXを塗り木村の伯父宅に行く。よく滑る。戻って靴の修理。午後、市電で偕行社に行き醤油と石鹸を受け取り、帰ってから再びスキー。人が多くて余り滑れぬ。大日坂まで行く。落下傘部隊の発表あり。寢床の中で10時10分、シンガポール降伏のニュースを聞く。万歳！ 感無量。大いなる歴史の日だ！

16日

生理の加藤教授、シンガポール占領に感激して黙祷をする。正午、運動場にて北島学部長以下の祝賀式挙行。白雪の上で、自分も歴史の中の1人であることを感じた。生田サボル、大垣内と渋谷にニュース映画を見に行き、落下傘部隊を見て感心する。白十字でパンを食って帰る。

17日

教練最終日、検定あり。ドジル。本日考課調書資料を書かされ下記の如く提出。あとでシマッタと思ったがもう遅い。これで自分の一生が決まってはやり切れない。

性質：性明朗、感情素朴。

長所：率直にしてユーモアを好む。

短所：感情に左右され易く、熟慮。時に果敢に迷う。

どうも軍人らしくない事ばかりだがもう遅い。

正直のところだが仕方ない。諦めろ！

18日

第一次戦捷祝賀日。9時半、綱町。全塾行進を行う。三田—宮城—三田と半分は駆け足でへばった。宮城前の人出は大したもの、まことに気持ちが良かった。石垣の上で属官が小旗を振ってこたえた。石山、嶋井とうどんを食いGinzaに出てみる。大変な人出。教文館でエホンを買ってくる。1時50分、陛下が二重橋にお出でになったと言う。有り難き事なり。

19日

医化学の時、ストーブのそばに置いた誰かの弁当に火がついて、先生大いにあわてる。防空演習のため、午後の授業なし。2時からのところを林さんが要領よくやって、2時半には帰してくれた。海軍依託学生採用が発表になり、規則書を貰う。大いに張り切る。

帰宅したら猫にガンモドキを取られたと母が大いにこぼす。

20日

寒い。雪がまだ溶けない。Osteologie遂に終了す。Os加藤の顔を見なくてもいい訳だ。10時、林さんの生理をサボリ大垣内、田中と板張りコートに古式武道大会を見に行く。弓術、棒術、ヤワラ術など面白し。生田さんも終講。2時半に予科の講義が全部済んだ訳だ。木村を加えて銀座に『未完成』を見に行く。なかなか良かった。チモール上陸、Port Darwin空襲。

21日

医化学は講義。午後、防空訓練。5時までと聞いてウンザリする。専らサボッテ病理の標本を見たりする。1回警察の連中が来て想定をやった。疲れる。ノドが痛い。

22日 日曜

寒い。Os temporaleを復習。なかなか面倒だ。海軍の規格を見ると胸囲が足りないので増強をはかり柱の間に、ブラ下がり棒を作る。夜も骨をやって一通り済む。

23日

暖かい。解剖望月さんのGefassが始まる。生理分からなくて眠いばかり。めしを食ってから帰宅、骨の覚え直しをする。骨の試験は13日と決定。ユウウツになる。

24日

雨。医化学の時間から雪となり猛吹雪にて昼までに数寸積もる。教練なし。骨の標本を一寸見て帰宅。炬燵に入って骨を一通り見る。大体覚えた。

25日

医道学、伊東氏の講演サボル。米がないので弁当なし、外で食べて帰る。米本土を砲撃したと。

26日

また雪。頗る寒冷。大申さんに出席して、その間金ちゃんと、生田の試験の準備をやり、終わってから山田が買ってきたSpalteholzで骨の勉強、解剖出

席する者少なし。夜は生田の試験準備に専念。空母大破、米本土爆撃か？

27日

生理、予習をして行ったので良く分かった。生田の試験、大いに覗く（カンニング）と方々から引っ張りだこになるが、予防の教室でおまけに席順も決まって覗きはダメ。エラク長い試験で弱ったが、大抵はやった。これで予科の試験は全部終わる。あとは成績発表を待つのみ。ToldtのAnatomieを野村に借りて家に持って帰り、頭全部の復習をする。

28日

快晴。医化学は講義。骨の試験の稽古をやる予定が金ちゃんの都合で止め。村上の定期を借りて日吉にハイキングに行く。新設の藤原工大はなかなか立派だ。数キロ歩いて4時半四谷に戻る。5時から補導会、あまり面白くない。めしも粗末也。

おどろきモモの木クリニック・パートⅧ



宮本秀明●神奈川県立がんセンター皮膚科部長

その1。牛海綿状脳症（BSE）

「びっくりしたな、モウ」なんて言ってる場合ではない。牛からヒトに移行しヤコブ病として発病するのだそうだから。英国で107人、フランスで3人、アイルランドで1人、患者が出ているという。エイズも怖いけどこれはヤバイことをやらなきゃ感染しない。牛肉が危ないとなると、江戸時代だったら良かったのにも思うし、あるいはヒンズー教徒ならばびくともしないのではとも思う。

しかし、病気ってのはどんどんニューフェイスが出てくるものだ。梅毒やエイズやエボラ出血熱は風土病が地域拡大したものだが、新変異型ヤコブ病は全く違うメカニズムである。

牛がよろよろ歩く映像が繰り返し放映された直後

には焼肉屋への客足はぱったり途絶え、倒産業者も続出したが「人の噂も75日」で、半年もしたら少しずつ客足が戻ってきたようだ。考えてみればフグ中毒や刺し身のビブリオ中毒で昇天する人は毎年結構いるのだから牛肉だけが怖いわけでもない。安売り肉しか買わないわが家を尻目に、スーパーの店頭には松阪牛だの米沢牛だのが所狭しと並べられている。——となると、焼肉屋の生き残りの山場は国内での新変異型のヤコブ病患者の発生時であろうか。

えー、患者なら既に発生しているって？

いや、小池栄子や佐藤江梨子や乙葉は狂牛病ではなく「巨～乳病」である。確かにBSE（バスト、セクシー、エンターテナー）かも知れないが……。

その2。どうして気づかないの

青森の会社の職員が8年間に亘って百数十回不正に引き出し計14億6千万円以上も使い込んでたのには驚いた。何度かに分けてその金のうち計8億円以上も南米チリの妻に送金していたとのこと。「チリも積もれば山となる」てか。「なアニータイした額じゃないよ」なんて嘯^{うそぶ}いているかなあの女は。日本人から掠め取った金で得た豪邸もチリの法律によって差し押さえ喰らったんだって。当然のことではあるが、チリも法治国家だったのだ。放置国家かと思っていたのに。

その3。悩める年頃、上の巻

長女の年賀状を垣間見ると「ふとんがフッ飛んだ」「きな粉が好きな子」とか書いてある。誰に似たのかギャグ好きらしい。

ある日「何か受けるギャグ教えて」とせがむので「当たり前前のクラッカー」「インド人もビックリ」「あっと驚くタメゴロー」「はっばふみふみ」「およびでない」等々伝授したところ、翌日「1個もウケない」とがっかりして帰宅した。

一体、近頃の中学生はどういう会話をしているのだろうか。朝、友達に会えば「おはよう」とでも言うのかと思ったらとんでもない。女生徒が男子に「おーい、ヤマモト、ボッキしてるか」と声を掛け、長女と仲のいい××ちゃんも男子にからかわれたりすると「てめー、タマ潰すゾー」とアイドルタレント風の顔で言うんだそうである。

その4。止まらないの一、弾む心は一

某週刊誌の「お宝発見プレミアム写真集」欄で「奈保子」が2万2千円である。見たような表紙だと思ったら、小生が20年前に1,350円で購入した河合奈保子写真集ではないの！百冊買ったときゃ、今頃左団扇^{ひだりうちわ}だったのだが……。

その5。悩める年頃、中の巻

長女がある日「タカラヅカに入りたい」と言い出した。

「そりゃ、東大入るよりきびしいよ」

「えっ、東大の方が入りやすいの？」

「そりゃそうさ（東大への合格率は0.01%。1万回受けてりゃ、国立Y大学工学部みたいにコンピュー

タのミスもあるかも知れない。しかし、タカラヅカは『限りなく透明に近いゼロ』」

「背が低いから男役は向かないの？」

「女役だってスターになるのは難しいよ」

「背が高くなるにはどうしたらいいの？」

「毎晩首でも吊ってりゃ伸びるかも」

「星組がいいかな、宙組^{そら}がいいかな」

「タコ組かブタ組だね」

「いっそ、モームスに入ろうか」

「もーブスなら入れるかもね」

この親子に幸あれ！

その6。首が回らぬ

利用したことも無いような銀行から住宅ローンの返済計画表が送りつけられて泡を喰った。

中身を見れば明細書の内容は見たような金額である。なあんだ、合併して銀行名が変わっただけであった。頭狂銀行、倒壊銀行、目潰し銀行、錯乱銀行、不死身銀行は何処へ。

その7。悩める年頃、下の巻

「学校の宿題が『ケイタイのマナーの標語』なので悩んでいる」と長女が言うので助け舟を出し、呼び出しの時振動するマナーモードを連想して3～4句ひねり出した。

「股にあてマナーモードでエクスタシー」というのも思い浮かんだが、停学喰らいそうなので、さらに1句捻り出し、「腹にあてマナーモードでダイエット」。これを提出したようである。

その8。後は野となれ山となれ

医学部出たての頃、診察室で先輩医師がアトピー性皮膚炎の患者の親に対して「大きくなれば治ります」と自信ありげに説明していたが、その患者が大きくなった時はその医師は大学病院にはいないのだ、——と後ろで見ていていつも思った。

その9。「アーティスト」って何？

「サポーター」と言うから、捻挫したとき肘に巻くものかと思ったら、サッカーのとき頬ぺたに国旗を書いて騒ぐ連中のことだった。小生にはフリーガンとサポーターの区別なんかつかやしない。

「ドラッグする」というから覚醒剤でもやるのかと

思ったら、パソコン操作時にマウスを握りしめて机を擦ることだった。白人女性はネズミが嫌い聞いていたのに、形が似ているとの理由で「マウス」が普遍的になったのも妙である。

「アーティスト」では作曲家なのか、画家なのか、彫刻家なのか、それ以外のものなのか判らない。しかし、その様に自称している連中にとってはどうでもいいことなのだろう。

「ライター」と言うから百円ライターでも作っているのかと思いきや、その人は売れない作家だった。

随筆家と言えいいのに、「エッセイスト」と言う。「一斉スト」かと思ったよん。そういえば不景気のせいかな近頃ストライキが少ないね。JRが親方の丸の国鉄だった頃は毎年違法闘争じゆんぽうとうそうというチンタラ運転を通勤時にやり、窓ガラスが割れるほど（実際に割れたこともある）車両をぎゅうぎゅう詰めにして善良な乗客を随分苦しめた。小生なんぞは股間にアタッシュケースを押し付けられたまま身動きできずに横浜―川崎のノンストップ10分間を「玉潰る思い」で過ごしたが、まかり間違えば今頃オカマバー勤めか、ジェニー伊藤かローリー寺西にでも弟子入りしてなきゃならなかったかも知れぬ。国鉄に対する恨みは未だに消えていない。

その10. 地上から飢餓を無くそう

ダイエットに励むブヨブヨ腹の人がいる反面、飢餓に喘ぐ人も地球上に多数存在する。飢餓に直面している人を救うのにはどうしたらよいだらうか。回答は大きく分けて2つに分かれる。

回答1. 食料や金を送って援助する。

回答2. 一切援助しない。

困っている人に手を差し延べたくなるのは人情である——という訳で回答1も正解かも知れぬ。しかし、食料や金を送ったところで一時的なもので大抵は焼け石に水である。という訳で回答2もまた正解であろう。確かに全員餓死すりゃ飢餓で苦しむ人は地球上からいなくなるのではあるが……。

その11. 秘中の秘

落ち目の女性タレントがあの手の写真集を出版することがしばしばある。恐らくは借金の返済のために当人は必死なのだろうが、世間はいささか食傷気味なのか本はさほど売れないことが多い。

そこで某巨匠はこう考えた。(a) 羽の無い蟬せみの写真を撮る、(b) 禿げ頭のアップ写真を撮る、(c) SサイズとMサイズのシャツを撮る。そして (a) を「セミヌード」、(b) を「ヘアヌード」、(c) を「SM写真集」と銘打って写真集にして売り出せば……、んーん、やっぱり誰も買わないか。

その12. ゾクッ、「北の国から」

病院の待合室のテレビで例の「会見」を見ていたお婆さんが「小泉さんは日帰りかいの。便利になったもんじゃ。30年程前は腕のいいパイロットでも福岡ソウルや京城で休みながら、随分かかったもんじゃが」と妙な感心の仕方をしてた。確かにあの時は往復6日かかったが……。

小生は大学時代を山形で過ごし、卒業したのは1979年である。折りも折り、もしも山形の隣の新潟県の学校に行っていたら、ひょっとするとどうなっていたであろうか。仮に乙姫様風の女性に「夕日を見に行きませんか」などと浜辺に誘われりゃ、拒まない性質たちなので同行するだろう。そして助けた亀ならぬ、スピードが出過ぎる船で「波の彼方に行ったきり」になり、今頃は小生の20歳頃の写真が全国津々浦々の紙面を飾っていたかも知れない。

大学受験の際、ソ連に占領されそうな気がしたので北海道の大学を受けるのは避けたが、危険水域に新潟の海岸線は念頭になかった。今なら「ハブに咬まれそうなので××大学は避けよう」と考えるかも知れぬが、当時は××大学医学部はまだ設立されていなかった。

10代後半から20歳頃にかけて、安田講堂事件やデモ隊と機動隊の衝突や火災瓶闘争、浅間山荘事件、よど号事件を見るにつけ、社会構造そのものが揺るぐような気がした。本四連絡橋や青函トンネルもまだなかったので革命が勃発したときのことも考えて「海を渡らずに実家に帰って来ることが出来る大学にしよう」と考えたが、今考えれば横浜を起点に発想するところがなんともガキっぽかった。

安田講堂の攻防戦を目のあたりにし、東大入試中止の報にショックを受けていたハマの純粋な青年もいつしか中年になってしまった。それとともに南ベトナムも東ドイツも消滅し、チェコスロバキアは2つに割れ、ユーゴスラビアはいくつかに割れ、「北海道を占領か」と一部の日本人が恐れていたソ連す

ら消滅してしまった。

この「おどろきモモの木」シリーズも「いつ消滅させようか」と考えあぐねたところ、長身のK編集

長に「書かないと『あの人は死んだのでは』と思われそうですよ」と妙な激励を受け、パート8完成に至ったのである。

めでたし、めでたし!?

昔の話

*

老祥樹

30年以上も前の話である。その約20年前、現代から50年以上も前、経済に興味を持っていたので、大学では経済学を専攻し、経済学者にでもなろうかと思っていた。運がよければ将来株で儲けて、左団扇に右扇風機の生活でもしようと臆げながら考えていた。が、しかし、大学入試に美事に失敗し、浪人生活に入る事になった。当時は予備校があるとは知らなかったの、仲間3~4人と家の近くにあった寺の薄暗い狭い図書室で勉強する事にした。

仲間の1人に「占」や予言に興味をもった者がいた。もっとも本人自身の大学入試の結果はまるで違った方向になったので、あまりあてにはならなかった。彼曰く「お前は どう見ても経済学を勉強する風貌じゃない。医学部に進んで医者になれ」と。単純なものでその時点であっさり経済学者になるのを諦めて医学部に進む事になった。今となってはどちらがよかったか分からない。その頃の高校生の最優秀に属する者は理学部へ、ついで法学部志望であり、医学部は3番手であった。彼が医学部を奨めたのはそのあたりを弁えての事だった。本人自身は法学部志望であった。

そんな訳で30年以上も前に医学部を卒業した。さて医学部を卒業したものの、卒業後1年間はインターン生活を過ごし、そのあと医師国家試験に合格してはじめて正式の医師となるのが習わしであった。歳ばかりとってはいたものの親の脛かじりの身分だった。しかし当時は医師免許がなくても患者を診る事が出来た。勿論、正式の医師免許を持った医師の監督のもとにだ。が、これは表向で、夜の宿直などは他に医師がいなくても勝手に医師宿直室に1人で泊り、夜の回診をしたり、急患で来院する患者をなん

となく診察、治療を行っていた。なかには病院に住み込み、そこからインターン病院に通っていた者もいたようだ。

我々インターン仲間も夜の宿直は週1~2回行っていた。昼間、午前中はインターン病院でぶらぶらしていたが、午後はまるっきり暇だった。そこで先輩の勤務していたK市の眼科専門病院に所謂アルバイトとして交替で行く事にした。K市はインターン病院から電車で30分程の所にあった。大工場が所狭しと存在し、巨大な煙突から四六時中もくもくと煙を吐いていた。現代で言えば公害都市だった。工場に勤める人達は当然ながら、K市に住む人々は煤煙のためか常に眼の異物感に悩まされていた。

我々のその病院での仕事(診療ではない)は単に患者の目を洗う洗眼作業だった。早速2枚の通勤定期券を購入した。2人で組んで交替で行くので2枚の定期券で充分だった。

なにしろ患者は多かった。午後6時までひっきりなしに洗眼のみに来院した。この単純な眼玉洗浄作業もはじめは仲々上手く行かなかった。片手の親指と人差し指で上眼瞼を反転させる事、即ち眼瞼をひっくり返すのだが、むつかしくて何回となく練習した。眼瞼を反転させないと、ただ眼瞼の表面の皮膚を洗うだけで、眼玉洗浄にはならなかった。我々4人はお互いに練習台になり訓練したので、一時は4人全員の目は兎の目のように真赤になり痒かった。誰よりもこの反転作業が上手く出来るようになったのはAだった。彼の指は細く、女のようにしなやかだった。「なかなか上手いじゃないか」と褒めたたえたので、のちに彼は眼科に進む事になった。単純なものだ。下手糞で何回も何回も練習してやっと

いちにんまえ
一人前になったのはBだった。彼の指は鋼鉄のペンのように硬く、茹であがったソーセージのように太く、象の肌のように荒れていた。「お前はとても眼科は無理だ。それじゃ患者を治すどころかかえって悪くする」と伝え、と、「そうだな、俺は力仕事に向いているようだ」とのちに整形外科を専門にするようになった。Cは生まれつき左利きだった。左手で眼瞼を反転させるのを他人が見るとなんとなくこちなく見えた。「お前ちょっと変だぞ。右手でしてみろ」「お前のをみてるといまにも眼ん玉をくり出すようだ」「危なっかしくてとても見てられない」と、AもBもDも異口同音に叫んだ。そこでCは右手を使ってみたが、とてもとても何年かかっても眼瞼反転作業は出来そうにもなかったので右手の使用は諦めた。どうせ精々1年間の事だと思い左手を使う事にした。

努力のかいあってどうやら皆は眼瞼反転は出来るようになったがそれだけではなかった。もう一方の手で水を満たした洗浄瓶を持ち、反転させた目ん玉を洗い流さなければならない。しかも1回洗浄するだけでなく数回は流さなければならない。せっかく反転させた眼瞼、目ん玉に上手く水が入らなくて鼻尖を洗ったり、頬にたらしたりした。なにしろ大勢の患者が列を作って待っていた。あせりもあった。早く患者を捌かなければならないと思うとかえって上手くいかなかった。しかし習慣とは恐ろしいもので、1週間もすると、患者が前に坐ると機械的にごく自然に右手で眼瞼を反転させ、横を向いていても洗浄液を正確かつ確実に目ん玉に入れる事が出来るようになった。眼科なんて単純な科だなあと思った。水だけで飯が食えるなら元手は殆ど只だなど思いながら我々は連日交替で眼玉洗浄作業を行っていた。

だが一向に患者は減る気配はなかった。むしろ逆に増えてるようだった。我々が洗浄する度に患者の目を悪化させてるのではないかとさえ考えた。病院にとってはこの上なく有難い事だったのかも知れない。先輩に「どうしてこうも毎日毎日患者が沢山来るんですか」と聞くと、「患者も習慣になっていて、なんとなく洗眼しないと1日が終わったような気がしないんじゃない？」と無責任な返事がかえって来た。成程など、よくよく注意していると、会社帰りの人達はお昼の弁当袋や鞆を抱えて我々の前に坐った。また夕食用の野菜や肉、魚などの入った籠を持った

主婦らしき人も多かった。黙々と椅子に坐り、洗浄が終わると無言で次の患者と交替した。人によっては1回洗浄したのち、また再び行列の最後に並び直し洗浄を2回もする人がいたのには吃驚した。会社帰りに銭湯にでも寄るつもりで病院に来ているようだった。もっともK市は日本でも有数な工業都市だったから、煤煙、塵が空中に夥しく漂っていて、快晴の日でも午後になると、市全体がどんより薄暗くなった。我々もK市の病院に行った日はシャワーを浴びるか、風呂に入らないと翌日とても病院に行けない程に汚れていた。鼻をかむと暗褐色の鼻汁が脳汁に混ざって出て来た。眼科専門の病院をこのK市に建てた院長は実に先見の明のある人だ。先見の明があるから眼科を選んだに違いない。こうして日・祭日以外は特別な事がないかぎり、交替で誰かが必ず病院に赴き、真面目に眼玉洗浄作業に従事した。都合がつかない時は3～4日前にこれこれの理由で来られない旨を告げたので我々の評判は悪くなかった。むしろ良かった。

眼科部長は小肥りの、背の低い、頭の中央が半分禿げかかった中年の先生だった。風采はあがらなかったが物静かな親切な先生だった。勿論、部長だったので眼玉洗浄作業に明け暮れる訳ではなく、手術とか検査が主たる作業だった。暇な時は眼圧測定方法だとか、手品師のように2枚のレンズを上手に操って、眼底の所見など教えてくれた。だが数日もすると奇麗さっぱり完全に忘れていた。

月末の25日になると纏まった銭が入る給料日だった。その日だけは特別に我々4人全員病院に馳せ参じた。4人全員が行くと治療用の席が足りなかった。だから交替で30分を限度に眼玉洗浄作業を行い、あとの30分は診察室内をぶらぶらしていた。従って給料日はいつもの半分の作業でその日の日当が得られた。いつもは五月蝿い院長もこの日だけはぶらぶらしていても大目に見ていた。部長も先輩も他の医師、看護婦、事務員、また売店のおばさんまでいつもの顔とは違って明るく、幸福そうに、ニコニコしていた。売店のおばさんは給料は貰えなかったが、給料日には病院全職員から1ヶ月分の掛け売り代金が纏まって支払われるので別の笑顔だった。給料日はいつもは6時までの診療時間が5時半で終了した。5時前から各人銘々1人ずつ事務長室に呼ばれて、事務長から直接に現金封筒が渡された。院長も同席し

ていた。事務長は苦虫を嘔み潰した様な顔をしていた。なんとなく自分の金を取られるように思ったのかも知れない。院長は一言「御苦労さん」と言葉をかけてくれた。我々もこの日ばかりは4時半頃から落ち着きがなくなり、そわそわしていた。眼玉洗浄作業には十分に馴れ、上手になっていたにも拘らず5時頃になると手元が狂って、患者の顔全体や背広などに洗浄液をふりかける事もあった。魔の25日の5時だった。給料を貰う前は落ち着きがなく、貰えば貰ったで早く帰りたく、ただ患者の行列が消えるのを願った。5時半近くになっても延々と患者が並んで列を作っている時は、特別に机、椅子、洗浄用具を用意させ、我々4人はフル回転で眼玉洗浄作業に従事した。最後の患者が終り、列がなくなると、脱兎のごとく診察室を飛び出した。

「最後が終りました」「御苦労さんでした」「また明日来ます」「サヨナラ、明日も頑張ります」と我々は口々に叫びながら病院をあとにした。行き先はいつもの溜まり場の大衆割烹料理屋だった。いつもは暗く汚い部屋だったがこの日ばかりは明るく広かった。部屋の中央にはやや傾いたいつものテーブルと、中身が半分顔を出した座布団が既に用意されていた。給料日は2級酒、合成酒が1級酒になり、ビールも飲み放題だった。料理も焼鳥と湯豆腐が定番だったのが、刺身、天ぷら、鰻などに昇格した。席に着くと我々4人の給料袋を封も切らずにテーブルの上に並べた。会計係のAは静かに各人の給料袋を丁寧に封を切りお札と小銭を分類した。「今月は先月よりお札が4枚多いよ」とニコニコした。「お、そうか。誰だ今月の頑張りが賞は」「俺は少ない筈だ。本業の方が少々忙しかったから」「それでも纏まると結構な金額になるものだな」とCは当然な事に感心した。

頑張りが賞とはアルバイトでもっとも稼いだ者に与えられる賞だった。病院のあるK市までの定期券を1枚買う権利と義務があった。即ち、4人で共有している2枚の定期券のうち1枚は頑張りが賞を取った者の名義にして本人が買う、あとの1枚は他の3人が金を出しあって買う事にして名義はだれでもよかった。要するに頑張りが賞を取った者は定期券購入費用を多く負担する代わりに確実に自分名義の定期券を所有する事が出来た。なんとなく変だったが、そう決めてしまった。

こうして我々4人のアルバイト料は一括プールされ、これから先1ヶ月の小遣いと昼食代となった。金が足りなくなると昼食が消えたり、あってもパンと牛乳だけで済ました。4人共特別な事がない限り自宅に帰ったので朝食と晩食は確保されていた。小遣いの殆どは飲み代、コーヒー代、映画代とかマージャン屋への払いだった。だが景気よく過せるのは精々はじめの1週間だけだった。給料を貰った日に既に1/4が消えた。次の日に残りの1/4が消え、3日目にはまたその残りの1/4が消失した。こうして毎日、残りの1/4が消えると永久に残金の3/4が残る筈だった。が、1週間もすると小銭ばかりがやけに多くなり、お札がなくなるから不思議だった。お札の顔が不足すると、夜の巷には出戻らないで、おとなしく本来の仕事に精を出し、早めに帰宅し、学問を勉強した。

臨時収入があると、「おおい、臨時収入だぞ、飲みに行くか」と薄暗い街に出掛けた。臨時収入の殆どは家からせしめた金だった。本代とか白衣の洗濯代とか言っては親から獲得した金だった。勿論、本は買わないで図書館から貸りたし、洗濯代だって病院で無償で白衣だけは洗濯してくれたので必要なかった。こうしてインターン時代を楽しく、明るく、のびのびと自由に過ごした。実に楽しかった。今、想い出しても。

現代の研修医制度の詳しい内容はよく知らない。が、伝え聞くところによると、相当に厳しく、忙しいとの事だ。昔のようにのんびりしたものではないようだ。もっとも医師国家試験に合格し、正真正銘の立派な医師だからそれなりの責任と義務があるのだろう。また多少と言えども給料が貰える。我々の時代はまだ国家試験に合格していない正式な医師ではなかったので責任はあったが、殆ど義務はなかったようだ。当然、手当、給料もなかった。だからこんな滑稽とも思える生活が出来た。全国に散在していたインターン生も恐らく我々と同じようなライフスタイルだった筈だ。無責任時代とは言わないまでもそれに近い1年間だった。

更につけ加えるならばその当時の眼科には今のよう光学精密機械は殆どなかった。記憶する限り、細隙灯器(?)位のもではなかったか。現代のメディカルエレクトロニクスの進歩は目覚ましいもの

がある。その最たる科は放射線科であろう。昔の放射線科は狭く、薄暗く、冷たい雰^{つめ}囲気の漂う空気の中にレントゲン装置があるのみだった。今はどうだろう、放射線科は明るく、暖かく、広大な部屋をいくつも持ち、数多くの診断装置、治療機器が^{ところ}処狭しと並んでいる。隔世の感この上ない。眼科にしてもそう。眼圧は目に風を吹きかけるだけで簡単に測定出来る。眼底だってモニターテレビに鮮やかにそ

の映像が記憶され、再現出来る。たいしたものだ。眼玉洗浄作業など行っている病院などはない。どこかの田舎にはあるかも知れないが。

それに引きかえ、皮膚科はどうだろう。極端な事を言えば顕微鏡1台さえあればよく、あとは皮膚科医の目と^{とし}経験だけだ。その目だって歳老いたら役に立たなくなる。経験だって年と共に薄れてくる。これからどうなる皮膚科は。

患者サマ

*

木花 光

石原慎太郎都知事の次男で俳優の良純氏が、慶大出の皮膚科医・稲田幸子さんと結婚されたことは、新聞・テレビで御存知と思います。実は、幸子さんは1年半前より私の所で働いていまして、当医会の会員でもあります。私はたまたま上司であったために、有名人が多数出席の豪華結婚披露宴で、諸先輩をさしおいてスピーチをするという極めて稀な症例を経験しましたので、ここに報告します。

披露宴は平成14年11月に赤坂プリンスホテルにて400人の規模で盛大に開催されました。政治家には御遠慮願ったとのことでしたが、慎太郎氏の顔の広さで、各界の著名人が一堂に会しました。さらに良純氏の関係で芸能界、プロスポーツ界からも人気者が集合して華やかでした。仲人はなしで、壇上には新郎新婦の両隣に、両家の御両親が座するという異例のスタイルでして、さすが慎太郎さんだとの声が上がりました。幸子さんの妹さんがカナダ人と結婚しており、カナダの披露宴は親族が中心のこういうスタイルだったと幸子さんが言ったところ、慎太郎氏がそれはいいと採用したそうです。

フジテレビ会長、西川武二慶大教授の祝辞の後、石原軍団の長の渡哲也氏が乾杯の音頭をとりました。ここまでは非常に堅苦しく進んだのですが、次に芸能人のテーブルにマイクが回りだして、俄然おもしろくなりました。アナウンサーの徳光和夫氏は、新郎が気象予報士でもあることにひっかけて、「新婚旅行の1週間は、日中は非常に穏かな日が続きま

すが、夜はフウフが激しいでしょう」。みのもんだ氏は「新郎が疲れて帰ってきたら、お医者さんですから診察したくもなるでしょうが、そこはぐっとがまんして、そういう時には中学か高校時代の制服を着て迎えてあげてください」などなど。1テーブルの芸能人のスピーチが終わり、2番目の主賓である直属の上司のスピーチということで、新郎側は劇作家で劇団を主宰しているつかこうへい氏でした。これまた、さすが劇作家で、「役者は人生経験をいろいろ積まないといけないのに、こんな慶応の医学部を1番ででた聡明な女医さんをもらったんではだめなんです。場末の子持ちのキャバレーホステスと結婚してくれた方が良かったんですが。父親が都知事で、兄が大臣で、奥さんは女医で、どうやってハングリーさを保って役者ができるんだと心配しています。僕は今でも、あのドアから子持ちのキャバレー



ホステスが包丁持ってでてきてくれたらと思っているのですが」。

大いに盛り上がった中、私の出番になってしまいました。「きょう出かける前に中3の娘に、『パパ、ウケをねらってはいけないよ。芸能人ばかりで勝てっこないんだから』と言われました」と、とりあえず話したら、これが案外ウケました。客がそれまでに充分すぎるほどノッているのです。次々に芸能人がでてくるものですから、中盤にさしかかっているのに、各テーブルでのおしゃべりはほとんどなしで、スピーチに注目しています。私としては、非常にやりにくいのです。新婦側の主賓ですから、新婦の学問上の優秀さ、手術も極めてうまいこと、また勉強ばかりでなく、剣道は2段だし、ゴルフも医局ゴルフ大会で2連覇中であることなどを話しましたが、彼女の場合は多方面に秀でているので、話し続ければ続けるほどお世辞を通りこしてウソのように聞こえてしまうのです。

「このように非常に優秀なのですが、性格も非常に良く、本日のようにいつもにこやかに患者さんに接してくれていますので、患者さんからのクレームが全くありません。今は医者もなかなかやりにくい状況ですので、これは医者として最も大切なことです。医者がたびたび不祥事を起こすからか、医者の地位は下がり、患者さんの地位は上がり、今や患者さんではなく患者サマと呼ばれるようになりました。以前、国民的歌手が『お客様は神様です』と行っていましたが、今や『患者サマは神様です』の時代です。

なにせ神様ですから、私が当直をしていると、水虫がかゆくて眠れないと夜中の2時に患者サマがいらっしゃいます。しかし、医者地位があまり下がると、そんな医者が療養上の注意を言っても患者サマは聞いてくれるのでしょうか。私はこういう風潮は、これ以上進んだらいけないと思っているのです。すでに神様なのですから、これ以上進むと、あとは『患者サマは仏様です』しかないのですから」。

大ウケでした。パパは芸能人に勝ったよ！

写真は披露宴がお開きの時に、配られたCD-ROMに入っていたもので、宴の前半にとった写真です。世の中、進んでいます。私は2年半ぶりにネクタイをしました。そういえば前回は後輩の結婚式でした。

